

# スポーツ振興くじの売り上げ不振に対する考察

A study of slack of the sports promotion lottery

1K04B203-4

細田 友紀子

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

副査 葛西順一先生

## 目的

スポーツ振興くじが導入される以前、わが国のスポーツ環境において 2 つの問題点が生じていた。まず一つに生涯スポーツの観点からであるが、近年日本ではあらゆる世代においてスポーツ人口が増加している一方で、こうしたスポーツ人口に見合った十分なだけのスポーツ施設や指導者の供給がしにくくなっており、改善が求められていた。もう一つとしては競技スポーツの観点からであるが、近年各国のスポーツ界において、選手の競技能力の著しい向上がみられており、これに応じ日本でも、選手をサポートするプログラムおよび施設などを整備・強化する必要があった。こうした問題点の解決には、新たなスポーツ振興のための財源が必要となった。そこで諸外国でのスポーツ振興策を参考にしながら提案されたのがこのスポーツ振興くじ、通称サッカーくじなのである。

しかし、こうした目的で導入されたスポーツ振興くじは現在、売り上げの面でも、人々の認識における面でも好ましい状況におかれているとはいえない。ではいったい何が原因となってこのような状況におかれてしまっているのだろうか。私は、この原因を考え、今後スポーツ振興くじの売り上げについてどのような展開が予想されるか、様々な観点から考察を加えていきたいと思う。

## 方法

まず第一章では、スポーツ振興くじの基本的な事項への言及に始まり、くじがいかにして導入されたかという経緯について、またスポーツ振興くじの仕組み、および現在スポーツ振興くじを取り囲む現状について具体的な情報を調査した。

また、スポーツ振興くじを購入するということは、人が“賭け”という行為を行うことに等しいと考えた上で、第二章では“賭け”を行う際の人間の心理を探った。過去の思想家が“賭け”についてどのような定義づけをしてきたかを紹介し、それに新たな賭けの定義づけを行い、スポーツ振興くじ売り上げ不振の原因究明の足がかりとした。

第三章では、同じ公営ギャンブルに分類される、公営競技と公営くじの仕組みやそれらの現状についての具体的な情報を調査した。

そして第四章では第一章から第三章までで得られた情報および考察を利用して、最終的になぜスポーツ振興くじの売り上げが不振かということや、今後予想される展開について述べた。

## 結果

結果として明確になったのは、スポーツ振興くじの BIG および宝くじのような偶然によって与えられるチャンスを獲得しようとする賭け行為は一様に売り上げを伸ばしており、こうした賭け行為に対する興味が年々増長しているということだ。

しかし一方で、スポーツ振興くじの toto および公営競技のような、偶然を排除しようとする賭け行為の売り上げ減少の傾向は明白であり、偶然を排除しようとする賭け行為の人気離れについては他の公営競技や、他の国にまで及ぶ共通の傾向であった。

## 考察

スポーツ振興くじは、totoとBIGという2種類があり、それぞれが賭けの2分類に属し、それらの性質を兼ね合わせており、公営競技や公営くじの性質を持ち合わせているようにも感じられる。しかし、様々な理由から実際のところどちらにおいても不完全であるのだと考えられる。

toto に関して、売り上げ減少の傾向は、偶然を排除しようとする賭け行為の人気離れから今後も回復は見込めないのではないかと考える。一方のBIGも、現在は急激に売り上げを伸ばしているわけだが、スポーツを媒体とした賭けくじであるという点で、宝くじとまったく同等のものとしての扱いをすることは不可能である。つまり、くじの最終的な結果に完全なる偶然性を見出せないため、この違いがある限り、BIGも宝くじのように売り上げが伸び続けるという推測をすることは困難であるということが本論文において考察することが出来た。